

2024年11月8日 **みたらいい** 溪谷で観察した植物

作；岡田

イワタバコ（岩煙草） シソ科イワタバコ属＊花期＝7～8月

名前の由来＝植物のタバコの葉に似ていて岩肌に自生しているので。特徴は葉柄に翼がある。溪流や湿った岩肌に自生している多年草、冬も葉は枯れず栄養を貯めて7～8月頃に10cmほどの花茎を伸ばして直径1.5cm位の紅紫色の小さな花を1株平均13個くらい咲かせる。植物は自然に交配種が出来るが本種には交配種はない。花はナスの花に似ているのでナス科の仲間の植物かと思われていたが、シソ科でした。薬効としては、胃を健康にする、と言われている、野草料理として若葉をほろ苦い早春の味として天ぷら、や、お浸しにして食べる、**＊花言葉＝涼しげ・愛らしい心。**



キッコウハグマ（亀甲白熊） キク科モミジハグマ属＊花期＝9～10月

名前の由来＝キッコウは葉が5角形で、これを亀の甲羅【鼈甲】に見立てた、ハグマ（白熊）とは、ヤクの尾の毛で作った飾りを言う、兜、槍の白い飾りや、僧が使う払い子に使われた、キッコウハグマの花冠の細長い裂片の様子を白熊（ハグマ）に見立てて命名された。本州～九州のやや乾いた山地の木陰に自生、背が低くへばりつくように葉を広げている、1株に葉は5～10枚、長い柄があり普通は5角形だが浅裂するときもある、花は3個の花弁で1個の花弁が深く5裂しており、1見15裂に見える1個の花かと思われるが、3個の花です。今回、随分見かけましたが小さく目立たないので気づかれなかったと思います **＊花言葉＝清楚・素朴・女性らしさ**



ウワバミソウ（蟒蛇草） イラクサ科ウワバミソウ属＊花期＝4～9月

名前の由来＝大蛇が潜んでいそうな場所に生える草の意味合い。北海道～九州の湿地帯や滝坪、溪流などの湿り気の岩場の所に群生している、野草料理の王様と言える、クセがなくどのような料理にも馴染み、東北地方ではミズと言う名前が親しまれ、冬季の青野菜の無い時の保存食として使われている。特徴は葉が楕円形で葉脈が左右不均等で先が尖り鋸歯がある。今回はあまり群生した大きなのがなかったが、濡れた岩場のところどころで見られました。

＊花言葉＝気まぐれ・移り気・自然。



ホオノキ（朴の木） モクレン科モクレン属＊花期＝5～6月

名前の由来＝「ホオ」とは「包」を意味し、大きな葉で食べ物を包むことに用いたことに由来する。ホオの木の葉は日本の樹木では最大級の大きさです。一番有名なのはホオバ味噌で、木の葉の上に味噌を乗せ焼いて食べる飛騨地方の食文化です。落葉広葉樹の高木で大きなものは高さ20～30m幹回り直径1m以上になる、枝が少なく真っ直ぐに伸びる、故に、大きな落ち葉は見かけるが、枝に付いている葉は見るのが少ない、材は柔らかく均質なので細工物などに使われる **＊花言葉＝誠意ある友情・自然の愛情**



葉はこのような輪生です

コウヤマキ（高野槇） コウヤマキ科コウヤマキ属

名前の由来＝高野山に多く自生していたことによる、古墳時代には棺などに使われていた、材は水に強いので風呂、漬物桶、等に多く使われたが、現在では希少種となって材として使用はないが、葉からのエキスを配合した歯磨き粉やオーラルケアグッズとして販売されている。常緑針葉樹で、特蝶は2枚の葉が合着したものと考えられる特殊な線状の葉が多数輪生に付く。北半球に分布していたが現在では日本のみに自生している日本固有種です。似たのに、マキ・イヌマキ、があるが2枚の葉が合着していない。

＊花言葉＝奥ゆかしさ。 コウヤマキの様な人になりたいものですね・・独り言



オシダ（雄羊歯） オシダ科オシダ属

名前の由来＝男の様に逞しいシダと言う意味合いです。大型のシダで亜高山帯の林床に群生するが、低地では空中湿度が高いスギ林に良く群生する、今回のみたらいい溪谷でもスギ林に多く群生していました。根茎が太く短く直立しており60～150cmの大きな2回羽状複葉を漏斗状に付ける、鱗片は長卵形から線状で光沢ある明褐色をしており中軸や葉柄に密についている。薬効もある、根茎を「綿馬根（めんまこん）」と呼び生薬として駆虫作用があったとされる、アイヌではカムイ、ソルマ、つまり「神のシダ」と名づけ、陰干したものを腹痛止めとして煎用していた。シダ類はよく似た種類が多く同定が難しいが、今回オシダの他に特徴のある綺麗なクジャクが尾羽根を広げた様に見立てた「クジャクシダ」ライオンのタテガミをイメージした「シシガシラ」など多く観察できました。

